

国際室 だより

No. 44

地下水資源開発セミナーコース小報告

昭和63年度に行われた地下水資源開発集団研修コースは、本コース開設以来満22年目を迎え、初めて帰国研修員を対象とするセミナーコースとして行われた。昨年8月19日に開講以来、順調に推移し、10月7日の閉講式で全日程を無事に終了した。参加研修員は20名で、アジアから11名、アフリカから6名、南米から2名、オセアニアから1名の構成であった（地質ニュース410号参照）。

本セミナーコースは1972年～1982年の間の地下水コースに参加したことのある帰国研修員を対象にしていたが、中国、インド、マレーシア及びサウジアラビアの4カ国からは新人が参加した。昭和63年度研修員の募集にあたっては、募集以前に発展途上国側の関連機関に、セミナーコースについてのファーストサーキュラーを送付し、また、63年4月の募集開始と同時にセミナーのジェネラルインフォメーション（GI）のコピーと手紙を該当する有資格者全員に送付するなどのPRを行っていた。

新人の参加は、途上国側になるべく多くの人間に研修を受けさせるという国の方針があるからと考えられるが、セミナーコースのカリキュラムは、帰国研修員を対象にすることを前提として編成していたので、新人にとっては難しかったのではないかと懸念していた。

集団研修コースの場合は、閉講式直前に、本コースに

ついての評価・提言についてのアンケートが実施されるが、本セミナーコースについては高い評価が得られ、新人を含めて研修員全員に対して本コースが、ほぼ満足できる研修内容であったものと考えている。

今回参加した20人の研修員は、平均年齢39.9歳、最高50歳で、地位は Board、Branch の Director、Head が7名、Senior Staff、Senior Officer 級が3名、Chief が2名、その他で構成され、ほとんどが管理職であったことが、通常コースと異なった特徴をもっていた。

研修中に頭痛1件、歯痛2件、足痛1件で通院する研修員はいたが、全員が全研修を無欠席でとおし、研修態度は立派であった。

本セミナーコースは、通常コースを履修していることが前提であり、また、研修期間が通常コースの半分、2か月であることから、カリキュラムは講義、見学を骨子とし、コースの後半にシンポジウムを行うことを内容とし、野外実習は行わないことにしていた。

講義・見学を通じて研修員からの質問が多く、講義を担当した講師の先生や、見学説明者が驚くほど熱心にディスカッションが行われる場面が多かった。

シンポジウムは、本研修がセミナーコースであり、帰国研修員に対するフォローアップ及びアフターケアとしての研修方針に沿うため、研修員参加国側の地下水開発についての情報交換や、途上国側の地下水開発に伴う問

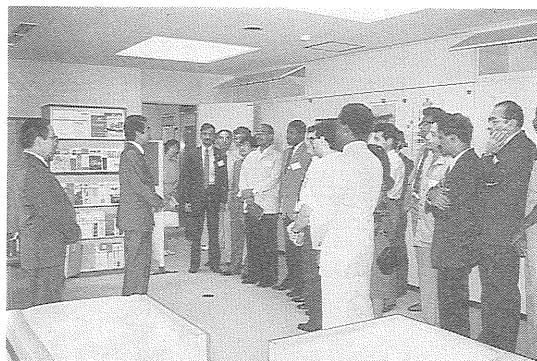


写真1 地質調査所井上英二所長を表敬訪問する地下水資源開発セミナーの研修員一行

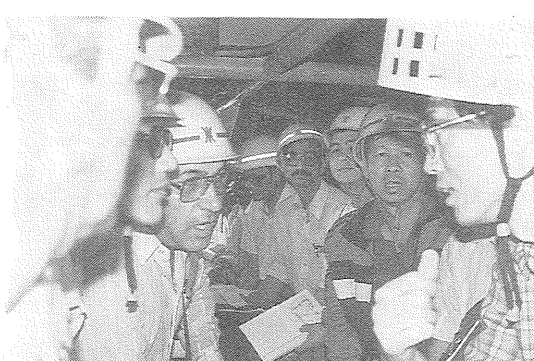


写真2 ヘルメットを着けて筑波山の導水トンネル内で地質調査所地殻熱部笹田技官から熱心に説明を聞く



写真3 沖縄県西銘知事を表敬訪問

題点を把握することを主要テーマとし 討論を通じて問題の解決をはかることを目的として行われた。

シンポジウムは昨年9月20日から22日までの3日間国際協力総合研修所(市ヶ谷)の国際会議場で行われ筑波大学 榎根勇教授(株)日さく 関根倫雄 村下敏夫 地質調査所 平山次郎 村上裕 石井武政の各氏の司会により 日本側プレゼンターとして名古屋大学 中井信之教授 地質調査所 黒田和男 筑波大学 榎根勇(株)日さく 関根倫雄 日本工営(株) 藤波正人 日本工業用水協会 蔵田延男の各氏が話題を提供した。また 研修員全員が自国の地下水開発の現状や開発上の問題点について発表を行った。

日本側プレゼンターの興味深い話題提供や 研修員の発表に対して討論が行われ 本シンポジウムは成功裡に終了した。

10月7日の閉講式には国際協力事業団総裁及び地質調査所所長の終了証書が研修員全員に手渡され 研修員全員の晴れがましい笑顔がこぼれた。この席で チョットしたハプニングがあった。研修員代表の答礼の挨拶終了後 研修員一同から日本側スタッフを代表してコースリーダー(池田)と TBIC 桑形研修監理員が式場演壇前に一人づつ呼ばれ感謝の言葉と記念品が贈呈されたことである。

本セミナーコースを通しての彼らの日本人に対する感想は日本に来てよかった。日本は古い伝統のある文化と最先端をゆく技術を見事に結合・調和させている。日本人は皆んな親切だ。等と好評であった。

最後に 本コースを支えて下さった関係者の皆様 講師の先生方 見学先でお世話くださった皆様 研修旅行でお世話していただいた静岡県・富士市の皆様 沖縄県・宮古の皆様 熊本県の皆様 シンポジウムを協賛して支えて下さった皆様 どうも有難うございました。ここに深い感謝の意を表します。(池田)

(お詫びと文章の追加について)

本年一月号 辻本崇史 著「浅熱水性鉄脈型金鉱床の鉱化作用による比抵抗異常について」の図解説が抜けました。お詫びし 文章を追加いたします。

- 第1図 CSAMT 法測定系概略図。
- 第2図 菱刈鉱山位置図(菱刈鉱山事業案内より引用)
- 第3図 菱刈鉱床模式断面図(菱刈鉱山事業案内より引用)
- 第4図 見掛毛抵抗折平面図(128Hz)(住友金属鉱山)より提供)
- 第5図 千歳鉱山位置図
- 第6図 見掛比抵抗断面図
- 第7図 比抵抗構造推定断面図
- 第8図 CSAMT 調査範囲図
- 第9図 見掛比抵抗平面図
- 第10図 比抵抗電気検層図(61 MASD-2)
- 第11図 比抵抗電気検層図(60 MAHT-1)
- 第12図 粉末X線折折結果(モンモリロナイト)一検層比抵抗値比図
- 第13図 比抵抗電気検層図(61 MANU-1)
- 第14図 鉱化地域に認められる熱水変質(井沢, 1986).
A: 温度依存型変質 B: 割目規制型変質

訂正のお知らせ

本誌第413号掲載の「フィリピン群島の地質発達史」中に誤りがありました。おわび申しあげると同時に訂正をお願いします。

p. 17右, 1.4-5, 礫岩の年代は始新世ではなく原文では late neogene となっており 新生代後期。最近の研究では中新世後期〜鮮新世前期とされています(SAREWITZ & KARIG, 1986)。

p. 19左, 1.8, 239 Orbulina は Orbitolina の誤まりでした。

御教示いただいた東京教育大学名誉教授橋本亘先生にあつく御礼申し上げます。(鈴木尉元)

地質ニュース	第415号	3月号
	定価 ¥650	〒実費
平成元年3月1日	発行	
編集	工業技術院地質調査所	
発行人	林久雄	
発行所	株式会社実業公報社	
	東京都千代田区九段南4の2の12	
	〒102	
	Tel. (03)265-0951(代表)	
	振替口座 東京1-32466	
	麹町局私書箱第21号	
総発売元	株式会社実業公報社	

©1989 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都中央区(丸)八重洲ブックセンター本店に常備してあります。